

PHD LETTER

〈29〉

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1988・12

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会
編集人：草地賢一
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替：神戸1-29688 財団法人ビー・エイチ・ディー協会
定価：100円
レイアウト：エフアンドエフ

- インドネシア・フォローアップ&スタディツアー2〜3P
- スリランカ・フォローアップ&スタディツアー5〜6P



大根を洗う娘さん/ビルマ 撮影/草地賢一

ビルマでは政治や経済が混乱しているとニュースが伝えている。
 庶民の暮らしにも影響がでているに違いない。
 でもかわらないところもある。
 小屋でくつろぐおじさん、大根を洗う娘さん。
 こちらも今のビルマの一風景。

インドネシアフォローアップ&スタディーツアーレポート 西スマトラにユリ君、アリ君を訪ねて

PHD協会 総主事 草地賢一

西スマトラの小さな国際空港タビンにつくと懐かしい三人の顔が飛行機のタラップの下に見えた。シャリフ・アリ先生、ユリ・タムリン君そしてアリ・ムルティム君。2人の帰国した研修生が何れも大変お世話になった加古川の丸山さん夫妻は、タビン空港に着陸する前から少し興奮気味。タラップを降りるとすぐこの二人が飛んで来た。そして丸山さんを目がけて「お父さん」と



インドネシアのタビン空港に降り立った一行を迎えたアリ君(左から3人目)とユリ君(右から2人目)

云いながら飛びついていった。アジアの草の根を訪ねるスタディー・ツアーは、何回引率してもこの感激が素晴らしい。既に第3回目を迎えたインドネシアスタディー・ツアーはこの感激の再会からスタートした。一行は小学5年生の山端和幸君を最年少に丸山さんが最年長。合計9人のよくまとまったグループであった。この旅のレポートは別項にゆずり、早速二人の研修生の近況を報告したい。

1987年4月に帰国した第4期生ユリ・タムリン君は帰国後西スマトラ州パダンにある州漁業振興部の漁業改良普及員として働いている。ほとんど立派な街のオフィスには居ない。グラスファイバーの小さなボートに船外機をつけて各地域の砂浜から直接村に入り、網、加工の新しい技術を貧しい漁民に伝授している。'88年1月からほぼ半年近くは漁村を訪ね、その小さなボートに寝泊まりしながら現地指導を続けていた。振興部の指導予算は少なく、今迄に自腹で約60万ルピア(邦貨換算約6万円、ちなみにユリの10カ月分のサラリー)を持ち出し、漁師の技術向上に取り組んだという。今最大の課題は技術向上と漁獲高が上がっても船主とその大半が持っているのてなく、公正な分配が可能になるために漁業協同組合を組織することが肝要だと考えている。彼が9才から高校を卒業するまで漁師として働いたパダン市郊外のウラカラン地区(現在は彼はここに住んでいる。最近ここは市内に通う役人やサラリーマンのベッドタウンになりつつある)の漁師と一緒に組

合づくりに精出している。漁業現地指導のあいまには約80人の生徒に日本語を教えている。授業料は取らない。振興部の同僚が英語、彼が日本語、いずれも無報酬のボランティア活動でやっていると、第6期生として現在来日中のアフナル・ファイジン、ベディも来日前に彼から手ほどきを受けている。結婚はフィアンセ(国立アンダラス大学医学部4年生)が卒業し、医師になる2年後まではお預け。彼の家族特にお母さんは元気に過ごされている。アリ・ムルティム君は帰国後4カ月、まだ何を始めているという段階ではない。しばらく自分かもつと漁の経験を積み重ねなければならぬ、同時に村の中で留まり続けるために一定の生活基盤を確立しなければならない。マレーシアのクアラルンプールに移住しているお姉さんの支援を得て、今年の3月頃から両親と共に小さな小さな雑貨屋を開いている。

本人の第一の希望は、日本で学んだ網の使い方や魚の簡便な加工法よりも、特に分配の公正さを保証する草の根からの協同組合づくりである。従って今年いっぱい時間をかけてその基盤づくりをやりたいといっている。8月に結婚したいと計画していたがパダン村で5月から2、3度式が相次いだため村人全体の経済的にその負担に耐えにくい。みんなのためを考えて89年5月に延期したとのことであった。ゴトロンヨ(相互扶助)が生きるインドネシアの村の青年として私はその報告を嬉しく聞いた。今回のフォローアップは次のような新しい試みかされた。今後の一つの取り組みとしてヒントになると思われるのでかいつまんで報告しておきたい。



パシバル村の漁師の質問に答えるアイルバンギス村の漁師達(中央はアリ君、西スマトラ、アイルバンギス村にて)

アフナル、ファイジン、ベディの出身の村アイルバンギスは西スマトラ州で最も漁業が盛んなところである。漁業協同組合、漁法、漁網など他の詳細な村からはいつとも注目されて

いる。しかしそこを訪ね見学したいと思っても一つにはその日暮しの漁師には時間的にも、経費的にも余裕は無い。第二にみだりに村を離れ、他村と交流するのは政府の疑惑を招きかねない。結局長い間アリの村パシバルからアイルバンギスとの交流は実現できていなかった。

ところが取々のツアーを介し、しかもツアー参加者の支援も得て村人が経費の1/4を工面、PHDが1/2、ツアー参加者が1/4カンパしてこの見学旅行が実現した。必ずしも充分な準備や調整があつて実施した訳ではない。しかし少なくともパシバルの漁師にとっては画期的な経験にはなったようだ。アリもここ



漁の合い間に網をつくろう村の漁師たち

動き出した動きをよくフォローし、願わくば協同組合づくりにつなげて欲しいものだ。もうひとつ今回のフォローアップで目指したものがあつた。それは帰った漁師を中心に西スマトラPHDのグループを誕生させることであつた。ユリを選挙する時から大きな関わりを戴いているシャリフ・アリ先生(西スマトラ州、国立アンダラス大学助教授で同州州議会議員)を助言者にユリ、アリ、そして来年4月から8月にかけて帰国する3人の漁師を加え漁師レベールの情報交換、共同実験など何よりも村の自立につながる実践を共有すること。そして地方政府の理解(これが得られないと絶対成功しない)や支援を得て将来計画をつくること。こうした来年からの動きをつくるためにはまずシャリフ・アリ先生を中心に、ユリ君、アリ君が連絡を密にすることを話し合った。この動きが継続すれば今後何か生まれるかもしれない。

この他に今回の旅では思いがけぬ成果が与え

られた。その第一はシャリフ・アリ先生によるジュニア・エクステンション計画である。つまり12才から18才迄の若い人が西スマトラと日本を相互に訪問し、ホームステイを中心にしながら、若い時からアジアと日本の交流を通じて「共に生きる」体験を重ねるというプログラムである。私もこれには賛成し、目下日本の側で調整を進めている。何とか89年8月には少年の交流を実現させたい。第二はアカデミズムの交流である。欧米中心

に関心や向きがちな日本の大学人に対し、西スマトラの大学人との出会いを通して学問のアジア性(こんな言葉があればの話)が高まればその影響は大きい。幸い神戸女学院大学の山口光晴学長が高い関心を示して下さい、既に89年1月14~18日の間、西スマトラのブン・ハッタ大学を訪問し、「戦後日本の発展の光と影」という演題で歴史学者の視点から学術講演をされることに決まった。西スマトラ州知事はこの二つのプロジェクト

に大変興味を示されこの試みを重視し、定着するために協力を惜しまないといってください。草の根の交流がその展開としてこのように動き始めていることに感謝すると共に更に大きな波がこの中から生まれることを期待したいものである。(ちなみに来年1月14日~18日のインドネシアの大学を訪ねる旅に関心のある読者は編集部にご一報下さい。4~5名程度であれば同行可能です)



「沢山の子供に囲まれ、びっくり」 黒田善二 志方中学2年(兵庫県加古川市)

この旅行のまえに、村にはいと子どもが集まってくると聞いていたけど、あんなにいっぱい寄ってくるとは思いませんでした。村の中に入って車を降りると、あっという間に、ぼくたちをかこんでしまいました。ごはんを食べるときもずっとぼくたちをみていました。はじめは、とてもおどろきました。

「村の問題」 小泉啓子 神戸YMCA日本語講師(西宮市)

すぐにパシバルの浜辺にござを敷いて、漁師の方々と交流会が持たれた。私たちは、長老の方から村についての現状を聞くことができた。漁によって生活を支えているにもかかわらず大きな漁船を停泊させる漁船を持たない悩みや、漁獲量の多少によって魚の値段が大きく変動し、生活が不安定であることや、豊漁時の魚を長期保存するための冷蔵庫や保温倉庫をもたぬ為に、魚を安くで仲買人に売ることが余儀なくされることといった問題が山積みしているようである。人口2000人のこの漁村には、電気のみならず、ガス、水道設備もまだ完備していない。学校は午前、午後2部制。無医村、新聞の購読は家によっては週一度くらい読めば良いほう。家の周りや海辺で遊ぶ子供達は大半が裸足。路上に家畜の糞も

見受けられる。物質的には無いものを数え上げるより、有るものを数えた方が手っとり早いと言うのが現実。話を聞き、現状を目の当たりにして、気が重くなった。

「村の子供たちは」 黒田真美子 中学3年(兵庫県加古川市)

私は、アリのさん住んでいるパシバル村へ行く前に「貧しいところだ」と聞いていたので、どのようなところか想像はしていましたが、びっくりしました。薄汚れた服装や中には服を着ていない子どもとどでした。足元を見ると、素足の子どもがほつてあげようと、袋から出すと一度にかけよって、取り合いとなり、破れてしまつてその辺に放つてしまうという状況になってしまった。時間がたつてから外に出ると、破れた紙がちらかっていたので、ゴミ拾いしていると、小さい子どもが手伝ってくれて、とてもうれしかったです。

「スマトラで知った日本軍の行動」 戎 嶋太郎 北浦三育中学2年(茨城県北浦村)

インドネシア研修旅行で、第2次大戦中、日本軍がインドネシアの人達を働かせて、巨大な地下壕を掘った所に行きました。入口の壁のレリーフには、強制労働の様子が描かれていました。やせた人もいれば、倒れている人もいました。また僕らぐらゐの子供までいたそうです。日

本以外にもインドネシアを支配下に治めた国はあるでしょうが、その中でも日本は戦争中、インドネシアに対して、とてもひどいことをしました。そのことを今の日本人は、あまりにも知らなく、無関心すぎました。もっと日本がまわりの国々に、どんなことをしたか、また今度どのようにして、つき合わなければならぬかなどのことを、今回の旅行で学びました。

「ブンクス港で感じた海外援助のあり方」 松本直樹 山手女子高教諭(神戸市)

ヤシの木を速くにながめる静かな入り江にドイツの援助でつくられたというブンクス港にたかまけた。港の出入口にはゲートがあり、ここでチェックを受け港に入ります。魚の水揚げも終わつたあとなのでほとんど人影はみえませんし、漁から帰ってきた船があつても、いきいきした人々の様子が見られません。漁民と港があつていないという感じなのです。いかにも政府が援助金だけで作ったという感じがします。ユリさんによれば、漁師がこの港を来たときには使用料を払わなければならないそうです。港内に立派な住宅がならんでいましたが、これは港につくられてはいたが、これは港にたかまけたが、びっくりしました。薄汚れた服装や中には服を着ていない子どもとどでした。足元を見ると、素足の子どもがほつてあげようと、袋から出すと一度にかけよって、取り合いとなり、破れてしまつてその辺に放つてしまうという状況になってしまった。時間がたつてから外に出ると、破れた紙がちらかっていたので、ゴミ拾いしていると、小さい子どもが手伝ってくれて、とてもうれしかったです。

「自分たちの力でがんばれ」 丸山陽子 主婦(兵庫県加古川市)

私たち夫婦に近くの子供を誘って参加しましたが、インドネシアでは色々なことにびっくりするやらで10才の和幸には、大変な事だったと思います。善二も太郎もマミも何かをつかんて、何かを見つけて、何か日本の生活の反省をしたことだと思います。ネラヤン(漁師)同志の交流、自分達の手で自分達の組合を作るために、私達が滞っている時に、一歩だけでも前進でき、またよっぽど参加できたことがうれしくて、カネ、モノだけでなく、自分の力でということが良くわかりました。

実り多き韓国研修から長期研修へ

農業研修生 / アジャンタさん(スリランカ) / ワラヤさん(タイ)

8月5日から21日まで17日間、アジャンタさん、ワラヤさんは韓国へ飛び、日本の農業との比較研修を行いました。ソウル到着後、アジャンタさんは有機農業の京畿道、呉在吉氏宅でお世話になりました。ワラヤさんはソウル近郊の養豚農場と、忠清南道、禮山地区で農村における婦人活動の現場を体験。「韓国の人たちは、日本人以上によく働く。また日本人にとっても対抗意識を持っている」と、語るアジャンタさん。

「韓国はタイに似ていて好きだ」というワラヤさん。目ざましい経済発展を遂げながら、礼節を重んじる心を失わない韓国の人々に、我々日本人も学ぶところが多いようです。

2人は韓国から帰国後、研修内容を絞って長期研修に入りました。アジャンタさんは、兵庫県南淡町、山口勝弘さん宅で有機栽培のみかんを一週間学んだ後、兵庫県丹南町、渡辺省悟さん宅で一カ月、有機農業の考えから実践まで、さらに詳しく学びました。10月10日からは黒田庄町、三谷康さん宅で農業経営、組合のシステムなど、実



有機栽培によるみかんについて勉強するアジャンタさん(兵庫県・南淡町・山口勝弘さん宅にて)



兵庫県波賀町の田中吾東さん宅で有機養豚農業、協同組合の学びに精出すワラヤさん

町、広岡史朗さん宅、波賀町、田中吾東さん宅を中心に、有機養豚農業、協同組合活動を学びました。各地での研修の成果が村に帰って活かされることが期待されています。

っこんだ学習をしました。相手の立場を常に考えながら、自分の意見もきっちり言えるアジャンタさんは、一段とたくまさを増したようです。

また、ワラヤさんは9月は豊岡市の八木貞夫さん宅で養豚のイロハから学習し、10月からは兵庫県福崎

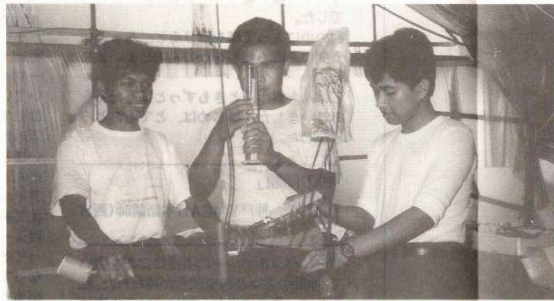
6期生研修生レポート

漁業研修生(インドネシア)

ベディさんは、アフナルさん同様、日本の漁業をひと通り見てまわりたいという考えです。2人は10月は田辺市の増殖試験場に移り、1週間お世話になり、その後兵庫県内各地で研修を続けています。

2人の先輩格、アフナルさんは9月2日から和歌山市で沖合漁業や小魚の加工を学び、その後粉河町へ。10月後半からは淡路島の福良などで養殖を学びました。

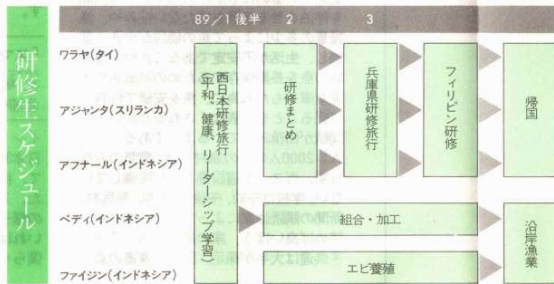
和歌山では海友会の皆様に大変お世話になったのです。日本語の達者なアフナルさんの行く所には笑いかけません。日本での研修も残り少なくなりましたが、これからの研修ぶりが大切なものとなってきてでしょう。



エビの養殖で重要な水質検査を勉強する研修生(右からファイジン、アフナル、ベディ君、和歌山県・粉河町の前田さん宅にて)

新人コンビ、ペディさん、ファイジンさん いよいよ実習に!ますます快調アフナルさん!

8月2日に来日したハスリ・ペディさんとモハマド・ファイジンさんは、8月8日から神戸市長田区の広瀬さん、豊中市の鈴木さん、杜本さん、池田市の樋口さん宅でホームステイさせていただきながら、9月16日まで神戸YMCAで、日本語学習を行いました。9月17日からは和歌山県粉河町で淡水エビの養殖を研究されている前田宗吉さん宅で、先に和歌山入りしていたアフナルさんと合流し、「バケツ一杯あればできるようなやり方を教えない」と語られる前田さんの姿勢に共鳴した3人は、とても粘り強く観察やエサやりなど続け、特にファイジンさんは口数は少ないけれど、ひたむきな学習態度で、すでに帰国後の方向をしっかりと見えています。またいつも明るくおどやかな笑顔を絶やさない



スリランカ フォローアップ & スタディツアー レポート

構成で、しかも青年海外協力隊員として2年スリランカで仕事をされた宮本さんの存在はメンバーにとって心強いものがあつた。

村では3軒の家に分かれお世話になり、帰国研修生の活動ぶりや村人の生活の様子を見せてもらい、また多くの村の人々と交流を行った。現在来日中のアジャンタ君の留守家族を訪ね、彼の研修ぶりを報告し、来年やってくるラミヤラタさんにも会い、話をするこもできた。途中、体調を崩したメンバーもいたが、お世話になった家庭の皆さんのケアで村を出る日には元気に別れることができた。我々の受け入れにかかわってくれたすべての村の人に感謝したいと思う。

(同行主事 藤野)

スリランカへは昨年3名によるミニツアーを実施したが、今年が本格的なものとしては初めてである。既に村へ帰った研修生は4期生ジャヤンタ君、5期生ニランティさん、チャールズさんと3名いる。彼らを日本でお世話された井上さん、西脇さんを含め総勢7名のメンバーが8月30日から9月8日の日程でスリランカの農村ボヤワラナを訪ねた。このツアーも短大生、主婦、医師、技師などバラエティに富んだ

出会った人たちの声 (インドネシア研修生編)

真摯な態度に打たれました
前田宗吉さん 淡水エビの養殖指導者(和歌山・粉河町)

「アフナル、ファイジン、ベティの3人を指導しました。3人も熱心で粘り強い学習態度で感心しました。ある日、ファイジンさんのノートを見ると細かい字でびっしりとメモが書き込まれているのでした。家に帰ってからその日勉強したことをまとめてみせるか、成果が楽しみです」(前) 前田さんは淡水エビの養殖の先生です。「村に帰ってできることを」と熱心に教えて下さいました。

出会いを大切に
奥久代さん 和歌山県海友会メンバー(和歌山市)

「アフナルさんに初めてお会いした時は、一見こわそうで、厳しい方かと思いましたが、とても話してみると、とても優しくしておもしろい人でした。これからもこうした出会いの機会を大切にしたいですね」(前) 和歌山市の研修では、奥さんはじめ海友会の皆様の御協力で、とても温かい交流ができました。

息子が一人増えたみたい
樋口明子さん(池田市)

「初めてインドネシアの方に来ていただいたのですが、ベディさんは目がきれいで、素直で、日本人のようにすれどころがなく、とても楽しかったです。すすんでお茶碗を洗ってくれたり、研修先からよく手紙もくれるし、気を使ったことは殆どありません。日本の物質文明の中で、大切なものを見失わないよう頑張ってください」(前)

樋口さんは今回初めてホームステイを引き受けて下さいました。聞らから好奇心旺盛なお母さんです。

日本の経験を土地の伝統や材料と うまくかみあわせれば……

西脇洋子 主婦 (兵庫県上郡町)



日本で習った手工芸を村の娘さんに教え、その作品をツアー一行に披露(5期生ニラカンティさん宅にて)

細長い棒状のような物を沢山作り、それを編んで作品を作り最後にラッカー仕上げをするものです。日本のように捨てる程十分に紙のない国なので、使い古したノートの紙を利用して、いろんな形状のものを作っていました。

底になる部分には布をはったり苦労したことと思います。日本からカレンダー等を選ったら…と意見も出ておりましたが私はその国にある素材を使って試行錯誤をくり返し、自分達ならではの作品を作りたいと思います。例えば家の屋根や壁につかわれているやしの葉でしようか。あれは上手に作れば籠とか袋物になると思います。また自然に生えているつるを取ってきて、花かご、果物かご等作ると面白いものがあるものが出来ると思います。彼女達の手工芸が村おこしの役に立つ、又は村人の生活向上を目指すものならばそこに材料が豊富にあるものを利用して、世界のどこへ持って行ってほしいような一流の作品を作り出す努力が必要でしょう。ひとまねて、日本人が買う等という甘い考えはとて村の向上に繋がらないでしょう。

ポヤワラーナ村で考えたこと

細見敬子 洋品店経営(兵庫県氷上町)

研修生のふるさとを訪ねて、まず心にひっかかったことは、日本に来たことが彼らにとって本当に良いことだったのだろうかということです。かえって日本や都会への憧れが強くなり、現状に不満を感じ、ポヤワラーナの村でコツコツと働くことに嫌気がさしているのではないかと。かえって純朴な人をスポイルしてしまっただけではないか。彼らの日本への憧れを聞く度、痛々しく感じ、重いしこりがいつも心に残りました。物があふれ、物にうずもれ、それでも満足出来ず、不平や不安の多い日本、彼らの目にはどう写ったのだろうか。ポヤワラーナの村と日本とのあまりの差に、日本での勉強を活かしたくてもすぐには出来ない現状で、日本に来たことが良いことだったのかどうか不安に感じました。日本へ帰ってから6期生アジャンタさんと、話し合う機会があり、少し考えが変わりました。彼ら一人倍スリランカを愛する気持ち、日本で一つでも多くのことを学んで帰ろうとする姿勢を見るのができました。「帰国後は、ポヤワラーナの村で、青年達で力を合わせて頑張ります。/」と一生懸命話してくる彼を見てると、こういう人がもっと多くなってきたらいいなと思います。結局、研修生のやる気と熱意にかかっていると思います。研修生の方から、村のために日本では、こういうことを勉強したいという明確な意識があるかどうかにかかっていると思います。価値観・物の考え方の違う村ですし、ゆっくりした歩みしか出来ないし、又、それで当然だと思います。遅くとも、一歩一歩、歩みを止めない限り、いつかは何かか形になると信じます。私も精一杯の拍手をおくりつけたいと思います。



現在、日本で研修中のアジャンタさんの様子を見に来た家族(アジャンタさん宅にて)

ニラーニは現在、英語の教師になる勉強をしています。教師になれば、賢明で、実行力のある彼女なら、日本で学んだ事を(保健衛生・手工芸等)英語と共に生徒達に自然に教えていく事と信じています。出来たことならば私たちの訪れたポヤワラーナ村にとどまらず先生をしてほしいものなのです。彼女は今、寮生活をしていますが、週末には家へ帰ってきて、村の娘さん達に日本て習った手工芸を教えています。今回は彼女と村の娘さん達の作品を見せてもらいました。毛糸をループ編みにして作ったぬいぐるみ、古紙利用の菓子器や花器等。日本では広告の紙を縦長に切り、くると

細長い棒状のような物を沢山作り、それを編んで作品を作り最後にラッカー仕上げをするものです。日本のように捨てる程十分に紙のない国なので、使い古したノートの紙を利用して、いろんな形状のものを作っていました。

底になる部分には布をはったり苦労したことと思います。日本からカレンダー等を選ったら…と意見も出ておりましたが私はその国にある素材を使って試行錯誤をくり返し、自分達ならではの作品を作りたいと思います。例えば家の屋根や壁につかわれているやしの葉でしようか。あれは上手に作れば籠とか袋物になると思います。また自然に生えているつるを取ってきて、花かご、果物かご等作ると面白いものがあるものが出来ると思います。彼女達の手工芸が村おこしの役に立つ、又は村人の生活向上を目指すものならばそこに材料が豊富にあるものを利用して、世界のどこへ持って行ってほしいような一流の作品を作り出す努力が必要でしょう。ひとまねて、日本人が買う等という甘い考えはとて村の向上に繋がらないでしょう。

多文化国家の難しさを痛感

大橋明日香 青森市の星短大1年(青森市)

ひとつの国の中で異なる言語、宗教、習慣があり、まとまていくことはむずかしいことだとは思いますが、私と村で出会ったニラカンティさんやバドラさんとの間に生まれた友情のように仲良く出来たらと思います。



次期研修生(ラミヤラクさん、右端)を囲んで話を聞くツアー参加者(チャールズ村長宅にて)

村の医療を垣間見て

井上弘 医師(兵庫県養父町)

スリランカでは医療は、都市部の自由開業医を除いて全て国営である。デイペンサリーと呼ばれている。村の診療所には常勤の医師はおらず、週に二日通ってくる。朝、訪ねると8時にはもう女性を中心にした患者さんが木製のベンチで待っている。どこが悪いのか尋ねてみると膝、頭、胸などに痛みがあるという。赤ちゃんを連れた婦人は「どうも太らないから」と言う。妊婦もいた。聞くとも無料配給の豆の粉を取りに来たという。見ると豆乳を乾燥したような感じで、水かココナツの汁で練って食べるそうだ。産前産後に無料配布される。他にマラリアの予防薬、蛔虫の薬も無料で配られるという。所内をみるとベッドがひとつと男性のヘルパーが2-3人隣室にいたが、薬剤の箱や瓶、注射器も見あたらなかった。

また別の日にアーユルヴェダという伝統医療を見た。地元で産する薬草を加工し薬としていた。先に触れたように診療所には外来薬が少ない。痛みを訴える患者には局所を問わず褐色の油薬が塗られている。訪れたところでも在庫が多かったのは強壮薬で、1日3回10mlずつ服用するのだが、アルコールの薬外強い甘い味であった。中では数名が働いており、また出来たばかりの液体が腐っていた。戦時中、南方戦線で薬品輸送が断たれ、薬草採取者数名の口伝で現地薬用植物の調査の経験がある私には、とても興味深いものであったが、詳細まで調査できず残念であった。

これからが本番、ジャヤンタ君。

藤野達也

昨年6月に帰国したジャヤンタ君。我が村についた時には姿を見せませんでした。これは何か具合の悪いことがあって顔を合わせたべんないのかと案じていたら、翌日ひょ

うひょうと現れました。きけば、種刈りか終わったので久しぶりにコンボの友達のところへ遊びに行ったとのこと。相変わらずのジャヤンタペースに苦笑いしながら一安心。



蜜蜂の世話(写真)や農業に励む4期生ジャヤンタさん

早速、宮本さんと彼の家を訪ね、帰国してから様子を見ました。現在は母親と兄との三人暮らしで、母、兄とも外に働きにでており、農業は彼が中心でやっています。家の新築、妹の嫁入、父親の死と帰国してからは大ゴト続きで、忙しかつたようです。主に米と続くとコーヒーをつくっていますが、将来嫁さんを迎えて自立していくには不十分です。チャールズさんから土地を借りる話もでており、これからが彼の本番です。特に今、日本で研修中のアジャンタ君が帰国してからの二人の連携プレーに期待がわかります。彼の家に三泊して、村を歩き、農作業を手伝っていただきました。丁度種刈りどきだったためあちこちで取組作業が見られました。村の中には2並3の人が小さな耕耘機やトラクターをもっ

ていますが、一般には水牛や牛の力で田を耕しています。村のほとんどの家が農業をやっていますが、最近では若い人たちが町へ働きに出ていくことが増えてきているそうです。ジャヤンタ君に聞いた農業からの現金収入を思えば、農業の魅力的な職業とは若い人には映らないのだと思います。街道筋には電気がきていますが、各集落までは電線が来ていません。にもかかわらず各家庭にはラジオやテレビがあり、どうしてるのかとコードをたぐっていくと車載用のバッテリーを電源としていました。これを見てこの村にも現金収入を必要とする生活が入り込みはじめ、こころばらくのうちに村の様子も従来の伝統的な生活から大きな変化を遂げるのだらうという予感がしました。

総主事メモ

総主事 草地賢一

今年も年末募金の季節がやってきた。われわれの事務所にも全国各地のさまざまなグループからその依頼状が届けられる。少々苦しいながら、しかし同じように人々の献金によってささげられる同種の団体としてそれらに目を通してみる。圧倒的多数が国内外を問わずモノ、カネの支援依頼が中心である。しかしここ1-2年の傾向はほんの少しではあるが変化してきているのではないと思う。つまりモノ、カネの援助からヒトの養成の支援を依頼する募金活動である。他にマラリアの予防薬、蛔虫の薬も無料で配られるという。所内をみるとベッドがひとつと男性のヘルパーが2-3人隣室にいたが、薬剤の箱や瓶、注射器も見あたらなかった。

が我々の社会に生まれてきている証候なのであるか。もしそうであるなら「平和と健康をつくる草の根の人づくり」を願ってやってきたPHDとしては誠に喜ばしいことである。これらの募金依頼は他のモノ、カネのそれと異なるところに、第一に、使われている写真に悲惨なものが少ない。また文面も同情心を呼び起こすような表現もあまりない。むしろ未来と希望という、ある積極性を感じるような文章やレイアウトが多い。そういえば、私たちが4年前にPHDCシンボルマークに採用したのはネパールの微笑んでいる少女のものであった。国際であれ国内であれ援助とか協力という運動は、最近のバングラデシュの未曾有の大洪水(これですら人災の要素が大きい)のような緊急救援を必要とするものを除いて、人に関わる限り一過性のものはほとんどない。その意味で効率、能率の価値判断基準からは極めて低い評価しか与えられない、そして何よ

りも地道なものである。しかしわれわれは愚直にこの地道な歩みを続けたいと願っている。またそうしない人折角献げて下さった多くの人を裏切ることになる。勿論、時には事務所の電話が鳴り響いてその応対に嬉しい悲鳴をあげる程の反応を得たい。そのためにある時はマスコミを利用してでも悲慘さを、かわいそうさを訴えて募金に取り組めたらなあという誘惑にさらされることは正直に告白すると、ある。裏を返せば地道な人づくりへの支援はなかなか爆発的に大量に得られていないということなのである。しかし少しずつ変化しているように思える。日本の市民の意識を信じて今年も全国のPHDを理解し支えて下さる人々に献金を訴えていきたいと考えている。明日のアジア、南太平洋の草の根に正義と公正を実現する指導者の輩出を願って。

PHD NEWS

国際交流基金「地域交流振興賞」を受賞しました
日本と諸外国との国際相互理解に顕著な功績を挙げたとして、10月18日東京において、PHD協会は表彰の賞をいただきました。これまでもお支えいただいた皆様にご報告するとともに感謝申し上げます。

会費・ご寄付寄託状況		
1988年	8月 ¥ 927,074	87件
	9月 ¥ 1,374,153	47件
	10月 ¥ 3,137,634	78件
	計 ¥ 5,438,861	212件

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄付を頂戴致しました。ご協力に感謝申し上げます。

お待たせ、「テーブル カレンの人々」が完成しました

昨年12月に実施したタイ・スタディツアー参加者によって編集をすすめましたが、このほど完成し、11月20日に出版されました。観光旅行ではない、アジアの草の根の人々を訪ねる旅から、何が見えたか?参加者のレポートや現地から長期フィールドワーク中のPHD会員三野洋子さんのレポートなどを収録、そのほか国際交流を見つめ直すための座談会も盛りだくさん。

B5版66頁(カラー2頁)
編集・発行/PHD協会
価格/500円(送料200円別途)会員の方は送料不要
関西地区の大手書店でも手に入りますが、近くの書店にない場合はPHD協会までご注文下さい。

アジア絵ハガキ 待望の新シリーズ

好評のPHDオリジナル絵ハガキシリーズ。前シリーズの品切れに伴い、8枚中7枚を入れ替え第3作としてデビューです。4枚づつAセット、Bセットの2組で各300円、フィリピン、タイ、ビルマ、スリランカ、インドネシア、ネパールの子供たちの笑顔をどうぞ。お求めは協会まで。

西日本研修旅行で目におかかりますよ

今年度も1月から2月にかけて西日本研修旅行を予定しています。お支えいただきながら日頃お目にかかれぬ皆さんにぜひお会いしたいと思います。研修生の村の様子、日本での研修の成果を彼らの口から聞いていただきたいです。只今、日程調整中。「ウチにも寄って」のリクエスト大歓迎。コースが決めれば会員の方にはご近所の交流会のご案内をします。

(予定)1/23~2/12

神戸—北九州—筑豊—福岡—熊本—水俣—諫早—長崎—有田—広島—庄原—三次—福山—岡山—備前—神戸

兵庫県研修旅行を3月に予定しています

各地で研修を続けている第6期生のうち1班の3名は来年3月に帰国します。研修の最後のまとめとして、兵庫県内を約1週間て巡り、研修のご報告とお礼を兼ね各地で交流の機会をと考えています。ご希望がございましたら協

会までご一報下さい。時期は3月上旬を予定しています。

第7期生ホームステイをお願いします

89年2月下旬よりPHD第7期研修生が来日いたします。来日後、約2カ月は神戸で日本語の研修を行う予定です。その際、ホームステイをお願いできる御家庭を求めています。滞在可能な方、またお知り合いで心当たりのある方は是非PHD協会まで御一報下さい。

次期研修生—

タイ1名(男性・農業)
フィリピン1名(男性・農業)
パプアニューギニア1名(男性・農業)
スリランカ1名(女性・保育、保健)

期間……2月下旬から約2カ月
(短期でも構いません)

内容……日本語研修中の宿泊・食事
経費……当協会規定の額をお支払いいたします。

アジアの友人とふれあい、異文化交流のチャンスです。よろしく願いいたします。



編/集/後/記

お久しぶりっ子の㊦です。おぼえて下さいましたか。九州から出てきて早や、八カ月。神戸の美しいおネーサマ方を見て、「目指せ、神戸エレガンス!」と、一瞬燃えた時もありましたが、どんな環境にも、すぐに慣れてしまう㊦です。「こうなりゃあ、素材で勝負だい!」と、一

方的に周囲の方々にあきらめてもらっております。(ご意見無用なの) PHDの財産は「ひと」です。㊦は強気で断言してしまいます。「PHDになんかしてやろう」と、事務所に顔を出したり、口を出したりが実際にできるのは、どうしても神戸近辺の方々に限られるのが残念です。PHDに関わって下さる方々とのさまざまな出会いは、いつまでたっても㊦を飽きさせませんもの。

皆様、どうか神戸においでの際は、PHDの事務所をのぞいてみて下さいね。㊦がせてお茶なりとお入れいたします、ダ。

訂正とお詫び

前号のレターの6ページで、レネさんとウィリーさんの写真が入れ違っていました。深くお詫びし、訂正します。

レター<29号>編集メンバー

赤松恵美子	柿原登志夫	梶原 靖子
川那辺裕子	内藤香代子	逸見 広心
増岡 裕介	三河 圭一	

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。

寄付者が個人の場合

寄附金合計額(所得金額の25%未満)マイナス1万円
寄附金控除額(所得総額から控除できる額となります)

(例)1000万円の所得の人が250万円を寄附されると、249万円の寄附金控除。

会員制度のご案内

PHD運動は会員によって支えられ、すすめられています。ぜひ会員としてご参加下さい。

終身維持会員：10万円 会 員：年額105千円

友の会会員：年額500円以上 任意の額
(ジュニア対象)

郵便振替

神戸1-29688

財団法人ビー・エイチ・ディー協会

寄付者が法人の場合

寄附金合計額が一般寄附損金算入限度額の2倍未満までが損金扱いとなります。

(例)資本金10億円で、その年の所得が3億円で1年決算の会社の寄附金の損金算入額は1,000万円未満まで。(一般では500万円)

ロータスクーポン・グリーンスタンプ・ブルーチップ

1988年8月11日～10月23日までの協力者ご芳名 願不問 敬称略

石谷林太郎 岩本文哉 竹内 裕

ロータスクーポン、グリーンスタンプ、ブルーチップの送り先は



〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202 TEL.(078)351-4892
PHD協会宛に